

湛然以後における五時八教論の展開

池田魯參

一
八教の教判論が、どうやら湛然頃に創まるらしいことを示唆している。⁽¹⁾

島地大等は、「台家の学者は大師の教判をもつて五時八教にありとなすが如し。けだしその大体においては、元よりしかるべきというと雖も、もし虚心平氣もつてこれを察する時は、断じて天台智者の教判は五時八教に尽きたりというべからず。(中略)しかるに『法華玄義』には、いわゆる三種教相を明して、彼の五時八教が、単に如來現実の説教を判釈するに止まるに反し、更に本迹二門の立脚よりして、遠く過去世にさかのぼりて、諸仏所説の經をも判釈するをもつてなり、實にかくの如きは、広大至深の一大思想によるものにして、天台智者の教判の中核は、むしろ三種教相にあることを知らざるべからず。」と説き、法華玄義十巻に説かれる三種教相説を中心に、智顗の教相判釈における根本的立場を確立すべきであることを強調し、湛然教学の変態を批判した、我が國の普寂の立場にも一分の理が存することを認めながら、五時

ほぼ同じ頃に、望月信亨も、「天台五時八教の説も亦勿論、慧觀に負ふ所なりと雖も、旧来の学者は一に之を天台の獨創の如く思へり、是れ甚だしき謬見なり。彼は唯だ従来の諸説に就きて有る程度の改易を試みたる迄にして、其の間多少の発明なきに非ずと雖も、そは固より枝葉に過ぎざるを察知せざるべからず。」と、天台教判論が果たした歴史的役割とその功績を奪い、今日的な經典の成立史的研究などをふまえた別の観点から、結論として「要するに化儀を中心とする教相判釈の説は、今日より之を見れば皆無意味のもの」であるといわなければならぬとし、天台の教判論で妥当なのは化法四教のみであり、化法四教のみで天台教判の説明は充分に足りると論じている。⁽²⁾

しかるに、その後に及んで、佐藤泰舜は、近代的に解明された經典成立史の立場からみても、天台学の教判論は充分に

存在理由を持つものであり、必ずしも学問研究の立場と矛盾するものではないことを論じた。この点、諸論文のなかでも、佐藤論文は穏当で極めて優れていますと私は考えるのですが、

彼は又、智顕の著書のなかには、「五時八教」という成句は見出せないこと、そしてそう名指す最初の人は湛然であること、等を確認し指摘した最初の人⁽³⁾のようである。そしてこれらの点については、その後、布施浩岳、田村芳朗などによつて再確認されている。⁽⁴⁾しかしに、この十数年来における学会で、関口真大は、私のみるところ、動機は別であろうが、島地説を一步進めた形で、天台の教判論は三種教相で代表せしめなければならないと説く一連の論文を発表し、ついに今日に至つて、五時八教は天台の教判に非ず、と説き、五時八教をもつてする、従来通りの天台学の学習法をいさぎよく廃棄すべきであると結論するに至っている。

そこで、本論では、天台学としての教判論が何でなければならぬか、というような教理論の是非を今ここで判定することは、一先ずおいて、後日も恐らく引き続き起るであろう、そのような課題を解明するための一助として、ここには、湛然以後における中国天台の教學史において、湛然に成立する「五時八教」の教判論が、どのような影響を及ぼしたのか、その動向と展開の跡形を探索してみたいと思う。

次下では、先ず、湛然に成立する五時八教論の特色をみ、

次いで、湛然以後にどのような形でそれが継承されるのかをみ、諦観録の成立までに至る教理史的背景について考えてみたい。

1、島地大等『天台教学史』（昭和四）『現代佛教名著全集』第九卷二六四頁参照。

2、望月信亭「慧觀の二教五時説と天台五時の判教」（『佛教史の諸研究』昭和一二年・望月佛教研究所刊）明治三八年稿参照。

3、佐藤泰舜「教典成立史の立場と天台の教判」（『支那佛教思想論』昭和三五年・不老閣刊）昭和一〇年稿参照。

4、布施浩岳「天台宗教判と其涅槃經觀」（『涅槃宗之研究』昭和一七年・国書刊行会）五二六頁参照。

田村芳朗『鎌倉新佛教思想の研究』（昭和四一年・平楽寺刊）一一一頁注記参照。

5、拙稿「五時八教論—関口説と問題点—」（駒大論集三号・昭和四七年）。拙稿「天台学における五時八教論」（曹洞宗研究員紀要第六号・昭和四九年）参照。又、佐藤哲英・浅田正博「関口博士の五時八教廃棄論への疑義」（印仏研究二三卷二号・昭和五〇）を参考されたい。

二

前述したように、天台智顕の教判論をトータルに「五時八教」と指定するのは、湛然が最初である。智顕を祖述して、最高の理解者であった灌頂の教學においては、湛然におけるこのような現象はまだ表われてはいない。例えば『涅槃玄

義』（大正三八）、『涅槃經疏』（同上）、『觀心論疏』（大正四六）などの現存する注釈書を探索する限り、「五時八教」と名指す例は一個所として存しないからである。ところが、湛然に至るとそれは一転する。湛然の諸著は、諸処に「五時八教」と名指す教判論を有するからである。勿論、そうはいつても、華嚴經の要文を類聚した『華嚴經骨目』（大正三六）、法華經各品の梗概を説く『法華經大意』（続藏一輯四三套二冊）、あるいは『授菩薩戒儀』（続藏二輯一〇套一冊）、『法華三昧補助義』（大正四六）などの、儀軌に関する著書は、必ずしも教判論を要しないであろうから、当然のこととして、湛然独自の説は見出すことはできないのであるが、その外の著書では、教判論は重要な位置を与えられ、それぞれの全体にわたって限なく論じられている。そうして、湛然はそのような天台学としての教判論を「五時八教」と指定するわけである。湛然教学において、それ以前にはみられなかつた新しい成語が成立するということは、何ほどかそこに異層な新しい意味が附加されているのではないか。あるいは、彼がそのような新しい呼び方をした時、その分だけ、局限的にいうべき点が顯在化され、整理されたのではなかろうか。そして、それは具体的にはどのような教説を展開するのであろうか。というような諸種の疑問が、ここに次々に生ずるのである。

それでは、最初に、湛然が「五時八教」という成句によつ

て、天台の教判論を指示している実例についてみるとしよう。

- 種種道者、即両教因人別教教道、五時八教故云種種（釈籤卷一・大正三三・八一六・c）。
- 法遍_ニ諸教_一為_レ該、咸收_ニ入_十_一為_レ括、以_レ該故周、以_レ括故備、遍_ニ於四教_一十六門、乃至五時八教一期始終、今皆開頭束入_ニ一乘、遍括_ニ諸教_一備入_ニ一實_一（輔行卷五之二・大正四六・二九二・a）。
- 言_ニ種種_ニ者、四時七教盈縮不_レ同、引導皆令_レ離_ニ偏小著_ニ無_レ不_ニ咸使_ニ帰_ニ會_ニ一乘、乃可_ニ名為_ニ大巧方便_ニ、文中語略但云_ニ種種_ニ、意該_ニ鹿苑_ニ法華前_一（右同・三四九・c）。
- 備依此説行則四教十六門、五時八教同歸一心（搜要記卷五・続藏二編四套二冊・一六四・d）。
- 四時七教盈縮不同、無_レ不_レ成_レ會_ニ帰乎一極_ニ、乃可_ニ名為_ニ大巧方便_ニ（右同卷六・一九一・b）。
- 種種之言、亦不_レ出_ニ五時八教_ニ、又隨_ニ本長短_ニ凡經_ニ幾度_ニ、為_ニ五時八教示_ニ不生_ニ來_上（文句記卷一下・大正三四・一七一・c）。
- 今用_ニ五時八教_ニ相入、方成_ニ一實_ニ、一時中橫堅間雜、唯至_ニ法華_ニ諦智純一、仍弁使_レ成_ニ方便之相（右同卷三下・二二二・c）。
- 教中則以_ニ權實本迹_ニ為_レ主、常以_ニ五味（イ本時）八教_ニ、以_ニ簡_ニ於權_ニ並以_ニ世界塵數_ニ以_ニ簡_ニ於迹_ニ（義例卷上・大正四六・四四八・c）。
- 客曰、斯失者衆、聞仁所_レ宗四教釈義可_レ得_レ聞耶、余曰、此之四釈、闕_ニ涉五時、牢_ニ籠八教、十方三世大小乘法咸攝_ニ其中、豈可_ニ率爾譯_ニ其始末_一（金剛鉗・大正四六・七八五・a）。

以上の如き用例を読む時、天台の教判を湛然が「五時八

教」と名指していたことは、事実として瞭然たるものがあると思う。

それでは次に、湛然がこのように名指した教判体系は、具体的にはどのようなことであろうか、と問うと、それは周知の通りの、「五時」は、華嚴・鹿苑・方等・般若・法華涅槃の五時のことであり、「八教」は、頓・漸・不定・秘密の「化儀四教」と、藏・通・別・円の「化法四教」によって構成されるものであることが知られる。証するまでもないが、彼の整理された見解を、次に数例挙げておこう。

○既約三法華一応レ須三八教、教雖レ有レ八、頓等四教是仏化儀、藏等四教是仏化法（義例卷上・大正四六・四四八・c）。

○能詮教門、綱三格槃峙二包三括秘露、謂漸頓不定秘密、藏通別円、得此八意、一代声教化道可レ知（止觀大意・大正四六・四五九・a）。

○起三八教者、既入レ位已八相成道、現三十界身、能隨順物機、用三藏等四、及漸等四、五時利物一代始終（右同・四五九・c）。

○次下引三法華意一具騰三五時者、所三以此中騰三五時者、全借三法華意、明三今部三五中第三、若不三具騰、焉知三近遠（淨名疏記卷上・続藏二八套四冊・三六八 b）。

ここで、智顕と湛然の間に、何がしかの距離を想定して、注意される点は、智顕が「五味」義に基づいて説明したことがらに対し、湛然では、多くの場合「五時」ないし「五部」の意味に限定して読んでいるということである。このことは、

いうならば、智顕では「五味」義にみられるような、比較的に無限定で幅のある教判の立場を指示していたのであるが、それに対する湛然においては、解釈理解を通して合理的な説明を要請する立場から、それは「五時」ないし「五部」というように、教化の仕方が、あるいは經典群の類型というような意味に限定されて読まれているということである。

智顕から湛然に至つて生じた、このような微妙な読み方の偏差は、湛然の側に立つて同情的にいえば、教学展開史上に起つた、内的あるいは外的な要請から生ずる必然のなりゆきであったといえようし、また天台の根本教學は何か、というような観点で、問題を智顕の側に戻していえば、湛然がしたようではない、別様な理解の仕方が可能ではなかろうか、というような反省も、又当然起つてよいようと思われる。しかし、歴史的な事実として、問題を湛然の教學に限つていうなら、化儀判を一層重視するような要請において、智顕の教判説を読んでいたことは、疑うことのできない事実であるといえよう。そうして、このことが、やがて、湛然教學において、玄義卷十に出る三種教相論を消極的に読み、一卷教相に出る、化儀四教説に積極的な意味をもたせる解釈へと連つていくのであり、さらにそれは一步を進めて、法華超八、純円独妙の主張へと結果するのである。それは又、澄觀教學を意識して、天台学の復権を自覚する過程で、化儀四教と三種止觀とにおける

る、頓漸の觀念をめぐる、複雜微妙な議論を惹起す論拠ともなるわけである。

しかし、このような湛然教学が荷負う特殊な教理内容とその理論構造については、印仏研究第二四卷一号（昭和五〇年）誌上において、「湛然教学における五時八教判の成立」と題する論文を、別に掲載するはずであるから、これらの解説は、そこに譲り、ここには湛然教学における問題点を指摘するのみにとどめたい。

三

湛然が「五時八教」と指示した天台教判が、湛然以後、その門流に出る人々によつてどのように受けとめられ、どのように展開されたのか、次下みてみたい。

湛然門下にどのような人があり、どのような著書があつたか、ということについては、島地大等「第二期暗黒時代」（前掲『天台教學史』第八章）、上杉文秀「荊溪門下の著書」（『日本天台史統』天台宗典籍談、昭和一〇年・破塵閣書房刊）、中里貞隆「荊溪湛然の門下と其著書」（山家学報第九号・昭和九年）、日比宣正「湛然教学の繼承」「真偽未詳等の著作」（『唐代天台學序説』昭和四一年・山喜房刊）などの研究がある。伝記乃至は諸誌学的な点について検証吟味を要することは当然であり、言うべき点もいくつか存するのであるが、これらは一先ず

先人の成果に譲ることとし、ここでは、今日に現存する著書のみに限り、湛然門下の人々がどのような教判論を展開しているかという、さしあたつての当面の問題だけに限つて調査してみたい。

1 普門（七〇九～七九二）

『釈籤縁起序』（大正三三）、『止觀輔行伝序』（大正四六）を著しているが、教判には闕説しない。

2 梁肅（七五一～七九三）

『刪定止觀』六卷（統藏二輯四套一冊）、『止觀統例』一卷（小止觀附錄・大正四六）、『天台禪林寺碑』（統紀四九・大正四九）にはみえないが、刪定止觀の末尾に附録する『智者大師傳論』（統紀卷四九所載）には、わずかであるが次のような天台教判に関する意見がみえる。

昔法王出世由ニ一道清淨、用ニ一音演説、機感不レ同、所聞蓋異、故五時五味半滿權實偏円小大之義、播ニ於諸部粲然殊ノ流、要ニ其所歸無レ越ニ一実、故經曰、雖レ説ニ種種道、其實為ニ仏乘、又曰、開ニ方便門ニ示ニ真実相、喻ニ之以ニ衆流入ニ海標レ之以ニ不ニ法門、自他両得同詣ニ秘密、此教之所ニ由作ニ也（大正四九・四四〇a）

3 李華（？七六六？）

湛然が『止觀大意』を与えた人として著名であるが、全唐文所載の「故左溪大師碑」（十一帙二冊）、あるいは他の撰文（同一冊）には、教判説はみえない。

4道遂（八〇四）

『止觀記中異義』一卷（続藏二輯四套二冊）にはみえないが、『釈疑』一卷（続藏二輯五套五冊）は、全十条のうち、前三条は教判に関する問答で、第三条には、次のようにみえる。問者は伝教大師最澄であり、答者は道遂である

最澄問、華嚴方等大品等所説、帶方便圓教為レ具三四一、為レ當レ不レ具乎、

座主答曰、諸經圓説圓人行レ之、不レ隔レ漸、四一無レ殊、偏機情隔不レ能レ得レ入、隨三權人增減之異故、有諸教不同也

湛然のいわゆる約教与釈の立場がいわれるだけで、約部の邊について超八純円を説くところはない。

5行滿（八二三？）

『涅槃疏私記』一二卷（続藏一輯五七套三冊）には、「四教五時」（三七一b）、「五味四教」（三九三d・四五一d）、「四教五味」（四三八c）などの称呼例があるが、次のような「五時八教」の成語もみえる。

此文多有所関者、謂五時八教一期化儀又被末代、四教不同、皆知常住仮性、修方便行而取小果等（四九七・c）

又、諸処に出る教判説のなから、特に注意されるもの数例を参考までに列挙しておこう。

○迷於部教者、部即攝レ教、教不レ攝レ部、如方等部具其四教、般若具三、大師判為兼但對帶、良由於此、方等般若中常與涅槃何異（三八三d）

○廣論五時興廢、具如法華玄文説也（三九二a）

○糾回如來等者、一代化儀五時隨逐也（三九二a）

○出世間上上者、滿字也、又約化儀皆具半滿小乘為半、大乘為滿、若純說大即是滿中滿、若約五時、中間二蘇對半明満、帶半明滿法華唯滿（三九六a）

○在在处处者、謂遍諸大小偏圓漸頓一期化意故云、豈獨今經等也（二九八d）

○或言偏方不定教者、今家釈云、不定有三種、一秘密不定、仏以一音遍赴衆機、衆生互不相知、名之為密也、二顯露不定者、衆生互知、或得大益小益不同也（四〇三a）

○譬漸教者、開頓出漸、即不起寂場而化鹿苑也、明開合意者、開頓出漸、會漸歸頓等云云（四一一a）

○中間諸法者、從乳至蘇次第四味、皆成醍醐故云法也、法即約教、味即約時、皆同歸常住也（四四六b）

又、最澄が、貞元二〇年（八〇四）に、行滿の口授を筆録したと記す、『學天台宗法門大意』（続藏二輯五套四冊）は、傍頭に、今依大師教門、五時説經八教釈義如來出世一代化儀不出此八

收攝具足（四〇一・a）

と標示し、天台教判が五時八教の組織体系で尽くされていると説き、統いて、五時とは何か、八教とは何かを示し、三觀の運用に寄せて化法四教を示した後で、涅槃法華同醍醐について分別し、最後に、天台止觀が法華三昧の異名であることを銘記して、発心と六即を説く。次下にその全文を掲げておこう。

言三五時二者、依三大經云、從牛出乳喻^三仏說三十二部經円満修多羅、華嚴頓教最初之說名^二第一時、次從^レ乳出酪喻^下仏從^二修多羅說[#]四阿含、十二年前小乘三藏名^三第二時、次從^レ酪出生蘇^下喻^三仏十二年後說三方等典^二名^三第三時、次從^二生蘇出熟蘇^下喻^二仏從^二方等後一說[#]諸部般若、始自^レ色心終乎種智皆摩訶衍名^二第四時、次從^二熟蘇出醍醐^下喻^二仏從^二摩訶般若說[#]大涅槃法華開權^上同一醍醐五味具足、法華一乘開前四味、會^レ三歸^レ一、無^レ非^二仏乘成^二醍醐教、獨得^二妙名^二云云

言八教者、謂頓漸不定祕密、藏通別圓、頓等四教是仏化儀、藏等四教是仏化法、會^レ漸帰^レ頓更無^レ余乘^二云云、藏等四教出^レ自^二天台、亦云^二三神僧授与、亦云^二三大師義立、是故大經云、下智觀故得^二聲聞菩提、中智觀故得^二菩薩菩提、上上智觀故得^二諸仏菩提、即其義也^二云云

言三三觀者、依^二中論四句偈、云因緣所生法、我說即是空、亦名為假名、亦是中道義、三觀一心中得故、云^二一心三觀^二耳、因中用^レ心名為三觀、果時証得名為^二三德入^二祕密藏、是故經云、安^二置諸子祕密藏中、我亦不^レ久自住^二其中、四教用^レ觀各有^二区分、巧拙不同、藏教拙度、折^レ色名^レ空、空觀猶拙、通教巧度、體^レ色名^レ空、猶來入^レ似、根有^二利鈍、利根菩薩、八地已上道觀雙流、接^二入初住、三觀具足、別教菩薩次第而修、先空次假後中、用^二前二觀^二為^二方便道、得^レ入^二中道第一義諦^二別別而修未^レ能^二圓融、故云^レ別耳、別^レ小別^レ大亦名為^レ別、得^二三觀名^二、圓教用^レ觀者、初心之人一心三觀、

觀^二於三諦^二、三諦是境、名為^二所觀^二、是觀名為^二能觀²、境觀具足、証^二三智理、初後不^二、大論燐炬即其義也、論言、三智實是一心中得、說時次第令^二人易^レ解故分^二次^二耳、

涅槃法華同醍醐教、大之与^レ妙一体異名、大師判^レ之、涅槃稱為^二據捨教扶律說常^二、何者法華開權^二周記^二、上中下根皆悉入^レ實、如^二秋收冬藏更無^レ所作、大陣已破余黨不^レ難、涅槃終窮無^レ非^二常住²、十仙外道增上之徒、廣開^二常宗²、純陀妙義皆以得^レ悟、據捨之說其在^レ茲乎^二云云

摩訶止觀一部大意、不^レ出^二法華三昧之異名、依^レ經修^レ觀、非^レ數^二他寶²、期心有^レ地、四種四諦、簡^レ非顯^レ是、發菩提心、後約^二六即²、令^二朱紫不^レ濫、六位具足、初後不^二、夫言^レ六者、簡^二其濫²、即者簡^二其顯²、不^レ同²他云^下即²仏濫²於上位²、故以^二六即²簡²定發菩提心四弘^上之說、依^レ境發^レ心上求下化誓、豈境如^二壞驢車正南而遊²、略述^二天猷²廣在^二諸文²云、

又、『六即義』（續藏^二輯五套四冊）は、その首に、

夫論^レ即者、名体不^二、今依^二天台大師五味判經四教积義²、圓教所^レ出、前三教無義立名^レ有（四〇三a）

と記し、以下に圓教の行証を六即義について説明する。

以上でみたように、行滿の教判論を総じていえば、極めて忠実に湛然教学を継承するもので、行滿独自の理解として注目すべきものはほとんどないよう²みえる。

6 明曠（一七七七）

『般若心経疏』一卷（續藏^一輯四一套四冊）には化法四教説は説くが五時説はみえない。『金鉢論私記』二卷（續藏^二輯五套三冊）には、湛然の五時八教説を承けて、それを「五八」と名指している点は注意すべきである。

余曰、此四教閑涉五時、牢籠八教、十方三世大小乘法、咸攝其
中、豈可卒爾談其始末、

初言三五時等者、通歷諸味故、云閑涉五時、義該名廣故、云牢籠八教、應知五時約會、八教隨機、會機不同故分五八、八偏於五、多少分途、大而言之、不出三權実、法華開会殊途、同歸唯一圓乘、五八咸妙、妙體博遠故、云咸摄其中、(二四五b)

八 教 大 意

金鉢論私記

前仏後仏、自行化他、究其旨歸、咸宗三妙、

言三五時者、仏初應代託陰摩耶、主伴互為純

此之四教約於五時、有多有少、華嚴圓教兼

仏之知見、但機緣差品、應物現形、為實施權故被二大機、說三因別法、約三五味譬名之為乳、

被二大機、說三因別法、約三五味譬名之為乳、

別、鹿苑但一三藏、方等對半明滿、四教具

分乎八、頓漸祕密不定、化之儀式譬如藥方、故涅槃云、從仏出三十二部經、譬從牛出乳、

故涅槃云、從仏出三十二部經、譬從牛出乳、

足、諸部般若帶半明滿、通別圓三、今此戒藏通別圓、所化之法譬如藥味、

初言頓者、從部得名即華嚴也、仏垂迹化塵劫巨量因、壽倍之果寧可喻、且從今日一期降

生託陰摩耶、主伴互為唯資三法、譬如日出先照高山、機不經歷、故名為頓、約譬次第、

此之四教約於五時、有多有少、華嚴圓教兼

以初譬、初名為乳味、故涅槃云、從仏出三十

二部經、譬從牛出乳、又二乘機生末受大

化、雖復在座如聲若盲、初會俱無見聞之

益、亦名為乳、故迦葉領解云、即遣傍人急追將還、迷悶墮地等即第一時也、

次從鹿苑至三千般若、名為漸教、既二乘全

生貴藥、非賤治、不動九會、脫妙著鉢、貫

初成於鹿苑、転生滅四諦法輪、唯被三藏小

日託、陰納妃生子、示成鹿苑轉生滅四諦法輪、小乘生信先度五人、約譬次第名為醣味、故迦葉領解云、密遣三人方便附近等、

又、『菩薩戒疏刪補』三卷(大正四〇)では、教相玄義に教判論を説くし、『八教大意』一巻(大正四六)は、湛然を承けて最も早く成立する、天台教判を論じた本格的な概説書として特に著名である。次下に、『私記』『刪補』と『大意』にみえる教判説を対照して読んでみよう。

菩薩戒疏刪補(順不同)

前仏後仏、自行化他、究其旨歸、咸宗三妙、

言三五時者、仏初應代託陰摩耶、主伴互為純被二大機、說三因別法、約三五味譬名之為乳、

別、鹿苑但一三藏、方等對半明滿、四教具

分乎八、頓漸祕密不定、化之儀式譬如藥方、故涅槃云、從仏出三十二部經、譬從牛出乳、

故涅槃云、從仏出三十二部經、譬從牛出乳、

足、諸部般若帶半明滿、通別圓三、今此戒藏通別圓、所化之法譬如藥味、

初言頓者、從部得名即華嚴也、仏垂迹化塵劫巨量因、壽倍之果寧可喻、且從今日一期降

生託陰摩耶、主伴互為唯資三法、譬如日出先照高山、機不經歷、故名為頓、約譬次第、

此之四教約於五時、有多有少、華嚴圓教兼

以初譬、初名為乳味、故涅槃云、從仏出三十

二部經、譬從牛出乳、又二乘機生末受大

化、雖復在座如聲若盲、初會俱無見聞之

益、亦名為乳、故迦葉領解云、即遣傍人急追將還、迷悶墮地等即第一時也、

次從鹿苑至三千般若、名為漸教、既二乘全

生貴藥、非賤治、不動九會、脫妙著鉢、貫

初成於鹿苑、転生滅四諦法輪、唯被三藏小

日託、陰納妃生子、示成鹿苑轉生滅四諦法輪、小乘生信先度五人、約譬次第名為醣味、故迦葉領解云、密遣三人方便附近等、

便不動寂場、冠日託生應乎丈六之質、示

是菩薩道、五仏咸令一切衆生開示悟入仏

之知見、涅槃雖明四教為息三權機扶律頤常、一一莫不皆聞仏性、故二經同味故並譬醍醐、今從仏意圓教消积、

(この部分は化法四教の後に続く。)

故涅槃云、從三十二部經出修多羅、譬從乳出酪即第二時也。

次明三方等大集寶積淨名、褒円歎大折小彈偏、自悲敗種、約譬次第名生酥味、故涅槃云、從修多羅出三方等典、譬從酪出生酥、故迦葉領解云、過是已後心相体信出入無難、然其所止猶在本処即第三味也。

次說諸部般若転教付財雖通洮汰、約譬次第名熟酥味、故迦葉領解云、長者自知將死不久等即第四味也、此等四味對頓名漸、法華涅槃非頓漸攝、開前頓漸歸三會、圓乘、約譬次第名醍醐味、故涅槃云、從摩訶般若出大涅槃合於法華、譬從熟酥出醍醐味、故迦葉領解云、臨欲終時而命其子等即第五味也。

次說諸部般若衍門淘汰不明三藏、約譬名為熟蘇、故涅槃云、從三方等出般若、譬從生蘇出熟蘇、既心漸通泰機情已動、次會姓與記捨諸方便、唯說圓乘、涅槃最後明常、仍以權教蘇息、此之二說咸譬醍醐、故涅槃云、從般若出涅槃法華、譬從熟蘇出醍醐即五時也。

余之六教遍在漸頓之中、同聽異聞互不相知、名祕密教、同聽異聞彼彼相知名不定教、祕密不定名下之法、只是藏通別圓仏世逗機、一音異解從化儀大判且受三名、略明化儀四教義竟、次明三藏通別圓四教、亦遍頓漸二味之中、華嚴頓部圓教兼別、鹿苑初成十二年前說戒定慧三並屬小但三藏教、十二年後般若之前大集寶積楞伽思益淨名金光明、除般若外並屬三方等、對半明滿具有三四教、諸部般若帶半明滿具通別圓無三藏教、法華會竟

次說三方等諸部四教並明、歎大褒圓、折小彈偏、約譬乃名生蘇故涅槃云、從修多羅出三方等典、譬從酪出生蘇

無_レ三唯一円教、涅槃最後談_レ常四教並知_ニ円理_レ所以_ニ二經同醍醐味、

第一明三藏教者、仍於_ニ法華及大智度論_ニ對_ニ斥小乘得此名也、論云、迦旃延子自以_ニ聰明利根、於_ニ婆沙中明_ニ三藏義、不_レ讀_ニ衍經_ニ非_ニ大菩薩、廣破_ニ三祇六度權義_ニ建立衍門通別円三大乘觀行、謂四阿含即修多羅藏、俱舍婆沙即阿毘曇藏、五部毘尼即是戒藏、此之三藏三乘同須_レ戒防_ニ身口、經多詮_レ定、論多弁_レ慧、聲聞觀_ニ於四諦、緣覺觀_ニ十二因緣、菩薩修_ニ三事六度、二乘則自調自度、菩薩乃弘誓、與拔因雖_ニ小異_ニ俱析_ニ夷陰_ニ而歸_ニ但空、聲聞階位立_ニ於七賢七聖不同、種福乃三生六十劫、次明_ニ支仏_ニ者、支仏此翻_ニ緣覺_ニ、若出_ニ無仏世_ニ觀_ニ華飛葉落_ニ頓悟、支仏名為_ニ獨覺_ニ、生_ニ於仏世_ニ聞_レ說_ニ因緣_ニ頓悟、支仏名為_ニ緣覺_ニ、並福厚根利謂四生一百劫所修因也、三明_ニ菩薩乘_ニ者、從_ニ初發心_ニ緣_ニ生滅四諦、發_ニ四弘誓願_ニ(略)若過_ニ三祇百劫、種福三十二相百福成_ニ一相、福謂相因福義多途難_レ可_ニ定判、於_ニ南洲_ニ男身仏出世時、緣_ニ仏身相_ニ故得_レ種也(略)此訖_ニ前百劫_ニ並下忍位也、次入_ニ補處_ニ生_ニ兜率_ニ、託_ニ母胎_ニ出生出家降魔、魔軍散已安坐住禪即中忍成就、次一剎那入_ニ上忍_ニ、次一剎那入_ニ世第一、次一剎那發_ニ真無漏、三十四心斷惑証果、十力無畏等皆成就

三藏滅_レ色帰_レ真、三乘無_ニ復異轍、四果乃是聲聞之位、緣覺共受_ニ支仏之名、菩薩三祇百劫所修、菩提樹下、三十四心斷_レ結成道名_ニ仏、

三明教攝者、积尊一化示身說法有始有終、四種差別、謂三藏教通教別教圓教、三藏具如_ニ俱舍婆沙、聲聞階位七賢七聖等殊、緣覺則有_ニ值_ニ仏不值_ニ仏等差別、菩薩則三祇百劫修_ニ相好因、並同一毘尼毘曇修多羅三藏之學、乃至菩提樹下一念相應、三十四心斷_ニ界內見思_ニ正習俱盡名_ニ之為_ニ仏、同僧布薩、無_ニ別菩薩律儀、故法華經云、不_レ親_ニ近_ニ小乘三藏學者_ニ而得_ニ三藏之名、即劣應身鹿苑示_ニ成丈六金容、乃至方等會中小機所、老比丘像是其_ニ仏也、

名レ仏、転ニ法輪ニ縁尽入レ滅、舍利住レ世広福ニ

人天、此是三藏三乘之相（略）今約ニ有門（略）

明二十義、一明所觀之境（略）二真正發心者（略）

三遵定慧（略）四破法遍（略）五知通塞（略）

六道品調適（略）七修對治（略）八識次位

（略）十無法愛（略）

次明三通教、通者同也、此教三乘因果大同故名

通教、故經云、欲レ得三乘ニ當ニ學般若、論云、

聲聞及緣覺解脫涅槃道皆從般若得、三人共

行十地、三人同斷見思、前無七賢之名、後無

等覺妙覺、所証雖同三藏觀法巧拙有殊、通教

體陰則真名レ巧、三藏析陰方真名レ拙、即是界

內巧拙相對、相對雖爾、此去三教並屬三乘、

大名雖同若地若行、名數多少深淺天隔、初乾

慧地即是外凡（略）二性地者（略）即內凡也、

三八人地、四見地此兩地不出入觀、共斷見

惑、發真無漏、見於諦理、即初果位（略）五

薄地者、體破欲界六品思惑、故名為薄、即

斯陀含果、六離欲地斷欲九品不來欲界、

即阿那含果、故云離欲、七已弁地者、三乘進

斷三色無色界八九七十二品思惑、即羅漢果、名

為已弁、聲聞行極、八支仏地雖同斷見思、福

厚根利能除習氣也、九菩薩地、從初發心

緣無生四諦、發菩提心至三六七地、從空入

仮、仮謂化道、空即空觀、道觀雙流誓扶三習氣、

通謂通學般若、共行三十地、體陰即真、發心、

自行兼人不同、故有三乘差別、乾慧性地名

内外凡、八人見地共斷見惑、並對三初果、薄地

斷欲六品思惟、對三斯陀含、離欲地斷欲思九

品、名第三果、第七地名已弁俱斷三界思

惟、即阿羅漢、八支仏地、九菩薩地、第十仏地、

後無等覺妙覺、初無内外七賢、類上非別

非円、比下法位天隔、約於當分三人行學

大同故立三通号、

三通教者、如三方等般若明三乘人共行十地、一

乾慧地外、二性地内、三八人地、四見地不出觀

初果齊五薄地、五薄地三個人同斷欲界六品、六離欲地斷欲界九品

三果齊七已弁地、七已弁地斷三界見思盡、八支仏地福德深利、九菩薩

地從空出假侵小習氣及界、十仏地一念相應圓滿也、此等十

果大同名為通教、示勝應身、魏堂堂如星

中月、即通仏相也、菩薩亦同聲聞律儀、

還生三界、用三道種智、遊戲神通、淨三佛國土、或就衆生三乘機熟、即坐三道場、用三念相應智慧、進斷余習及界內無知、得三一切種智、名第十弘地、(略)今亦約有門、明三於十法成乘、初明觀境、(略)二明發心、(略)三安心、(略)四破法遍、(略)五識通塞、(略)六道品調適、(略)七對治、(略)八識次位、(略)九令安忍、不著相似法愛、

三明三別教者、此約三界外獨菩薩法、教理智斷行位因果別、前二教別後圓教、故名為別、涅槃云、四諦因緣有三無量相、非諸聲聞緣覺所知、諸大乘經廣明三菩薩歷劫修行、行位次第互不相攝、並此教也、華嚴明三十住十行十迴向為賢、十地為聖、妙覺為佛、瓔珞明五十二位、前加三十信、仁王不論三等覺、但五十一位、金光明經但出三十地弘果、勝天王但明三十地、涅槃明五行十功德、既是界外菩薩行位、隨機利益、豈得定說、今約瓔珞總明三七位、一十信、二十住、三十行、四十迴向、五十地、六等覺、七妙覺、初十信者、(略)即是外凡伏忍位也、住行向、三並屬內凡柔順忍位、二明十住者即習種性、從信入住習、從仮入空、斷界內見思、故名習種、(略)三明三十行者、性種性也、從三十住空性而入三十行仮性、名性種性、(略)四明三十迴向道種性者、修中道觀伏界外惑、

別教者、証諸因果、次第修成四十二位三賢十聖、初緣三界外地上中理、別於若藏若通、空假非、即中道弘性、又別圓教、故名為別、

三別教者、如瓔珞仁王等經明五十二位、地前屬凡名賢、登地屬聖、或云七地入無功用、十信數進數退名為外凡、十住入空而斷見思、及斷三界外上品塵沙、十行出仮斷中品塵沙、遍知三四教十界藥病、十迴向位斷下品塵沙、向後修中伏三外界無明、一分纔落即入三初地、八相成道、因果迢遙劫數巨量、觀行歷別別、前別後、故名為別、示成報身即其相也、

故名_二道種_一（略）五明_二十地_一聖種性者、証_二中道觀、故名為_レ聖（略）此之十地破_二界外十品無明、更破_二一品_一入_二於等覺、更破_二一品_一入_二於妙覺、始終但破_二十二品無明、乃與_二圓教第二行_一齊（略）且約_二自行四門_一之中有門_一所修十法成觀、初明境者（略）二明發心者（略）三安心者（略）四破法遍者（略）五識通塞者（略）六道品調適者（略）七對治助開者（略）八知次位者（略）九安忍者（略）十無法愛者（略）

次略明_二圓教_一者、圓名_二圓妙、華嚴法界廣大、淨名入不二法門、般若最上之乘、涅槃一心五行等、並圓妙法也、此等圓妙一理無_二他兼帶半滿、權覆_二於實旨趣_一猶_レ隱、今從_二弘意_一卷_レ權帰_レ

円人六即、即理何殊、約_レ事分_レ六、不別而別、初心畢竟、具性俱融、境圓智圓、修圓性圓、故名為_レ圓、略示_二旨歸_一、具如_二別說_一也、

四圓教者、圓信_二三障_一即是三德、報障即法身、煩惱即般若、結業即解脫、依_レ信起_レ行。三觀行成、以為_二凡地_一措_レ心之首（略）一一品中以_二五悔_一為_レ本故（略）此等五品並外凡位仮名_二五品_一既転明靜豁_二聞慧_一、通達無滯深信難_レ動、即入_二十信六根清淨內凡位_一也、見思之惑任運先除、如_レ治_レ鉄作_レ器龜垢先尽_レ、故仁王般若云、十善菩薩發_二大心_一長別_二三界苦輪海、與_二三藏通教仏果位_一齊、與_二別教十迴向_一齊也、信名雖_レ同別教人之與_レ行深淺永殊、住行向地亦復如_レ是、圓賢位竟、次明_二聖位_一四十二品並破_二界外微細無明_一（略）今且總明十法名相、一

觀不思議境者（略）第二發真正菩提心者（略）
三巧安止觀者（略）四破法遍者（略）五識通
塞者（略）六道品調適者（略）七対治助開者
(略)八知次位（略）九能安忍（略）十無法愛、
更引涅槃証成其理（略）此譬三藏教五
味也（略）此譬通教五味（略）此譬別教
五味（略）此譬下圓教不定教（略）問別具五味
亦具四教及方等涅槃四教何別、答涅槃四教俱
知常住、方等四教隔別不融別、具四教法四
人、一謂菩薩人知四種法、雖四不同、善須得
意、故知稟教自行化他、暗於八教旨歸行解甚
難、通會為實施、權意在於實、卷權歸實意
在於權、權實雖殊不思議、一本迹久近妙理恒
同、十方仏化無他、戒定智慧人人備足、汝等
所行是菩薩道、五篇何局自度心修、無二無三
之談方便焉不歸實、得法華意、冰冶雲銷、
古今失意之人、咸招打脚之喻、執實謗權
尚違安樂之行、執權謗實愆逾七逆者哉
(略)

以上のように、対照して読むと明確であるが、化儀説について
ては、「私記」と「大意」が共通し、化法四教については、「刪
補」と「大意」が共通する説き方を示す。この点からみても、
湛然以後における五時八教論の展開（池田）

『八教大意』は他の誰れの撰でもなく湛然下の明曠の著書で
あるとするのが、いかにもふさわしい。

それはともかくとして、刪補では不明であるが、私記と大

意では、法華の非頓非漸をいい、法華の純圓を説く。勿論、大意は涅槃を含める点で少しく異なるともいえようが、大意の全体の意図をくめば、結論としては法華の純圓をいつていることは明らかである。又刪補では、不定秘密を含めた化儀四教を説かぬが、私記と大意はほとんど共通の説を示す。但し、大意では、化法四教それに、十乘觀法を適用し、觀門との関連を重く印象づけていることと、四教各々に五味喻の適用がある道理を示していること、あるいは置毒殺人の義を説き、又、方等涅槃の圓教対説における相違点を料簡する点などは特色があり、これらは、他の二書にはみられない、大意独自の見解である。

因にいうと、『八教大意』が後世に及ぼす影響は大きい。

後述するが、徳円疑問、宗顥決答の『釈疑』の、第五条に出る建立四教と開漸四教の同異の問題に、この『八教大意』が引かれている。さらには、諦觀錄の成立に重要な契機を与えていて、諦觀錄の三大註には、この点について何も記さないようであるが、志盤は、『統紀』卷一〇所載の諦觀傳に録して、諦觀錄は、『八教大意』を修治したものにすぎず、前人の功を没して、己れの所業とするかのような題名を附するのは不当である、と評している。志盤のいい方は、少々穩当でないとしても、諦觀錄が『八教大意』を読み、その結構や教説に多くの範を得たであろうことは、両書を対照して読めば

明らかである。その点で、繼天が『八教大意便蒙』において、統紀の説を非難し、具に二書を読むことをしないからそのようなことをいうので、具に読めば、諦觀錄と八教大意の所説では、段全に相違すると主張するのも少しく論じ過ぎである。又、智旭の『教觀綱宗』は、化法四教を説くに際して、『八教大意』を模範としたことを注意しておきたい。

7道違（？）

『涅槃玄義文句』二卷（続藏一輯五六套二冊）には、湛然教学を承けたような教判説はみえぬ。灌頂を祖述する以上に出ないようである。

○此中心有四句漸漸・漸頓・頓漸・頓頓

初云漸漸者三教因位也、漸頓者三教果頭也、頓漸者圓教因位也、頓頓者圓佛果也（一七一d）

『涅槃疏私記』九卷（続藏一輯五八套一・二冊）には、「五時八教」の成句で、教判が説かれている。

○三乘初業者、彼屬三方等部、叙昔退大之後、及以中間不愚於小、今經顯露聞常權取小果為蘇息故、與今經三乘非例、多有所關於小大及五時八教、來至今經並知常住權取四位之果以為蘇息、不可尅定判之（一四九d）。

○別有所關者、五時八教七重二諦等、遍於一代或盈或縮、相入相即、及開顯等、皆非三乘所知（一五七b）。

『維摩經疏記鈔』二卷（続藏一輯九二套一冊）には、次のような教判説がである。

記云、定及不定者、定謂顯露五時次第、不定通二不定也、

記云、橫堅者、橫則約行、味味皆爾、堅則約教、方等但得生蘇而已、
二頓轉者、此是三藏教中菩薩、來至方等得入圓者、則是顯露不定、
若在鹿苑得入圓者、即秘密不定也、若生語見者、位在五品外凡、
或順道法愛者、位在六根著相似法愛、若得入者、名醍醐中煞人、
言醍醐者、五品六根、皆稟醍醐之教、故名醍醐煞人也、

『法華文句輔正記』一〇卷(統藏一輯四五套一・二冊)には、

「五味四教」(三三-a)、「四教五味」(一五八-a)などの呼称例が
みえる、が、諸処に散見する教判説のなかで、注意される説
を数例次下に列举しよう。

○此彼淆混者、若不曉今家积意、還成將於昔教、以混法華上故
○先愚密教者、謂迷於顯密之密、猶為權覆、故名為愚、守株尚
昧者、若更守於法華前教則昧今經本迹二門、今弘教者、多
有此執(六c)。

○故秘密所用者、明四教若在於仏所用、則成秘密、若阿難伝所
用秘密則成顯露、又秘密教者、如法華玄文第一云、如來於法、
得最自在、三密四門無妨之用、或此說漸、則彼說頓與不定、
或彼說漸則此說頓與不定、而互不相知、名秘密不定、十方齊
說等云云、不定教者通約法華前四時座席説教之時(一〇d)。
○所見意者、只合明五時教相次第一以表於正耳(四六a)。
○一一用時中橫論権實者、乳二、生四、熟三、唯三藏中五人等於
諸天、以之為横耳、圓為體、三為用、即是教教皆有體用、
多即方等般若、少即鹿苑華嚴隨部對之亦應見耳(五四c)。
○一時中橫堅間雜者、五味為堅、部內其教多少為橫、越次相

接名之為間、又味味中部内、皆具秘密不定、名之為雜、又
密入名横、顯入名堅、或橫或堅故云間雜(右同)。

○疏始終次第等者、此示後人、今將涅槃五味譬文來、對今經
五時之文、文相次第分明莫過於此(一〇五d)。

○而常分別諸仏化儀者、於平等見中而復常了諸仏化儀、一一
無非先頓後漸、會漸歸頓等(一六一b)。

○疏子白母時至者、說法華經、是五時畢故云時至也(一八二
d)。

以上にみた道遯の教判説を総じていえば、湛然を繼承して
それ以上に出る説はなかったようである。中里論文が「仮り
に道遯を六祖門下なりとして、多くの門人中最も眞面目に師
説を守り一步も踏み出さない継紹者を求むれば、行滿と道遯
であった如に思ふ。中でも撲直なるものは道遯である。」と
評する点は注意してよいと思う。

8 智度(?)

『法華經疏義續』六卷(統藏一輯四五套三冊)は、傍頭に五
重玄義を概説するが、その教相段に次のような説がみえる。

第五教相者、若弘余經不眞明教相於義無傷、若弘法華不
明教相者、文義有闕、但聖意幽隱教法弥難、前雖三其義一也

(略)初大意者仏於無名相中、仮名相説、若說余經各赴緣所
益未眞明教意、如説華嚴初逗圓別之機、高山先照、直明次第不
次第修行地上之功德、不弁如來說頓之意、次説四含、增一明入
天因果中眞寂深義、雜明諸禪定、長明破外道、不明如來曲
巧施小之意、次説方等折小彈偏歎大褒圓、慈悲行願事理殊絕

不レ明ニ並対呵責之意、次説ニ般若、論レ通則三人同入、論レ別菩薩独進、

廣歴ニ陰入ニ染淨虛融、亦不レ明ニ共別之意、若ニ涅槃在レ後、略斥ニ三修、粗点ニ五味、亦不ニ委説、如來原レ始要レ終之意、凡此諸經皆是逗ニ会他意、令ニ他得益、不レ談ニ仏意意趣何之、今經不レ爾、結ニ是法門綱目、大小觀法、種種規矩、皆所レ不レ論、為ニ前經已説ニ故、今經但説ニ如來布教之元始、中間取与漸頓適ニ時、大事因縁究竟終訖、若宿殖純者、初即頓ニ直明ニ菩薩位行功德、言不レ涉ニ小、文云、始見ニ我身、聞ニ我所説、即皆信受入ニ如來慧等云云、次其不レ堪者、隱ニ其神德、以ニ貧所樂法、方便附近語令ニ勤作、文云、我若讚ニ仏乘ニ衆生没ニ在苦、如レ此之人、応ニ以ニ此法ニ漸入ニ仏慧、次既得レ道已宜ニ須ニ彈斥、即如ニ方等以ニ大破ニ小、文云、苦切責レ之曰示以ニ所レ繫珠、次宜ニ兼ニ通半滿ニ淘汰上、如ニ大品遣ニ蕩相著ニ會、其宗途ニ文云、將ニ導衆人、欲ニ過ニ嶮道、次過ニ此難ニ已定ニ之以ニ父子ニ付レ之以ニ家業ニ托レ之以ニ權迹解云、權是迹門之近顯レ之以ニ實本、本是本門之遠本、當ニ知此經唯論ニ如來設レ教大綱ニ不レ委ニ細綱目ニ詭

不レ開異、約ニ理是同思之（二一八二b）。

本書は、経、疏、記の三部に涉って注釈を施し、処々に道遼の『補正記』や、湛然の所説を批判し、俱含唯識学を援引して独自な釈風を作っているが、教判説については概ね湛然教学のわくを超えるような主張はみえない。

9 智雲（？）

『文句私志諸品要義』二卷（続藏一輯四五套三冊）には、教判に闇説するところはないが、『妙經文句私志記』一四卷（続藏一輯四五套四冊、四六套ニ冊）には、「五時八教」の成句もみえ、処處に教判論が記されている。

○自非ニ昔日鷲峰之上親承此世寶山之下、獨得入ニ權實本迹重玄之門、見ニ五時八教深廣之心、以闡ニ斯幽致者、則此無方絕称之首、何由能顯暢哉（三三六a）。

○今謂權實約ニ教淺深、約ニ時即四教五時、橫堅之別名故也（三五六c）。

○五時八教十界之化故名ニ廣（三五六a）。

○若準ニ余文、四教之後、更須五時、方極ニ今經之意、並準可レ解（三九二d）。

又、如是釈について、次のような極めてユニークな解釈がなされている。

○一代五時通共教ニ化衆生ニ作ニ種熟脱（二一九a）。

○記、引嘉祥三種法輪殊乖稟承者、大師華嚴為ニ頓、鹿苑至ニ般若三味為ニ漸、他立ニ華嚴為ニ根本ニ三味為ニ枝條、大師立ニ法華出ニ頓漸外、他立ニ法華為ニ摂末帰本（二二八a）。

○記、二頓不別者、恐悞、華嚴從ニ説名ニ頓、法華從ニ開名ニ頓、開

俗如如、恐人不_レ曉故、從_レ義云_レ入也、真理無_レ有_二變異_一故名_レ如也、通既相即相即不異故不_レ離_レ俗、即真別通果中別通_二果円_一故出_二離偏道如_一也、即以_二入字_一积_レ如、如字积_レ是、円中真中相真之如_一会_二入中即故不_二動出_一而即是也、住_二云云_一者、意略如_二向明_一矣、上約_二漸教_一积竟

次有_三一句_二是积_二頓教如是義_一也、謂者頓教如是義相即与_二向來漸中円教如是之義相狀_二同也、然有_レ円有_二漸円_一有_レ頓有_二漸頓_一此之四名一物而已、但以_二筆理周備_一異_二於偏顯_一故名為_レ円為_レ物頓說、對_二於漸演_一故名為_レ頓、偏機後會名為_二漸円_一漸機後入故名_二漸頓_一今指下即頓之相與_二漸円_一同_レ以_二體無_レ別故也

次有_三一句_二是积_二不定教初如是之義、此亦無_レ別、還是前之三法、但前兩_二不_レ向別_一無_レ有_二常定_一即是其義矣

次有_三一句_二即积_二秘密教初如是之義、此亦無_レ別、還是前之三法、但上三是顯露、今即明_二其密_一也、或漸或頓、或復不定互不_二知聞_一故名_二秘密_一而言_二隱不伝_一者、既是至聖無方適化、當時既互不_二相知聞_一故不可_二以流_レ傳末代、然密既只是前顯_二傳_レ顯即是傳_レ密、今論_二其法體_一且就_二當時相狀_一隱顯無方非_二是可_レ傳之物、故言_二不可伝_一也、思_レ之然此等義已備玄文、此但粗点而已

公私_二四種大綱_一即具_レ解_二四綱目_一是約_二八教_一略积_二如是義_一竟、人多於_レ此問云、今此法華之教、於_二前八中_一為_レ內為_レ外、积_レ此仍有_三別_一云在_レ内即円頓故、一云在外正明_二開會_一不_レ同_二不開會_一故、一云亦內亦外円頓體同開顯別故、今謂若在_レ內者、法華不_レ異_二方等般若_一、以_二彼皆有_二円頓之義_一故、又非三會_二故也、若亦內亦外者、應_レ有_三九教_一名為_二何等_一、一宗無_レ此名數_二故也、若亦內亦外者、既不_二一向_一半

合半異、八既不_レ成、既無_レ單九、何所_二論亦九、又不_レ是、義既不_レ可、文又無_レ依、此為_二何物_一故此三說並不_レ可_レ信、上三既並有_レ過、必_レ応更有說言、非_レ內非_レ外、若爾為_レ遮為_レ表既無_レ両亦、何所_レ論_二遮表耶、又法華即虛空之物以_二彼虛空非_二内外_一故異說既爾今準_二玄文判教、初明_二融不融_一中、先約_二余經_一分_二別八教差別、以明_二根性不融、次約_二法華_一破_二會前八_一顯_二根性融、此則今昔四五差會之義明矣、於_二諸所說_一無_レ所_レ乖矣、如何弁_二五時之要會、遂_二八教之差殊、皆法華涅槃之極談、乖_二玄義諸文之至說、便後學增_二諸諍論_一失之豈不_レ甚哉、都由_レ迷_二於五時之宗、貪_二彼八多_一愛_二此一妙_一邯鄲之步兩無_レ所_レ成、執_レ內者曰玄文初約_二五時_一以积、則法華具在_二漸中_一、何以言_レ非_二八内_一、积曰若爾五味既明_二漸義_一、則華嚴法華並為_二漸教_一、何故玄文乃云_二華嚴為_レ頓法華非_レ漸、此积已矣不_レ俟_レ繁_二辭_一、故知但是通談_二始終_一明_二漸會歸_レ一分義了非_レ為_レ漸也（三七八 b ~ d）。

智雲は、知られるように、化儀四教に基づいて如是義を釈するのであるが、これは特色があり特に注意したい見解である。又、八教攝不の問題についても、四句に分別して、湛然の法華超八の主張に対しては批判的な態度を示しているように思われる。そして、この点に関し、「後学は諸の諍論を増しているが過失の甚しきものである。それはひとえに、五時の、八教の、根本趣旨に迷うことに始まる。」と説く智雲の概嘆の消息に想いを致せば、彼の当時、八教攝不をめぐつて議論が沸騰していた天台教学界の状況が彷彿とする。いずれにしろ、本書は、道暹の『輔正記』、智度の『義續』、湛然の教説を諸処に批議する特色ある資料といえる。中里論文は「智雲は、

同門中学殖に於て卓越せるのみならず、多角型の第一人者であつたと思ふ。」と結んでいるが首肯できる評であろう。

10 法聰（？）

『釈觀無量壽仏經記』一卷（続藏一輯三二套四冊）があるが、ここには天台教判が「五時八教」と名指され、その所説は極めて一般化された図式的な説明となつて、いることが知られる。

教相中為_レ四、初明_ニ部時、次明_ニ翻訳_ニ三明_ニ藏撰_ニ四簡異、初大乘方等教者、即第三時生蘇味也、対_レ半明_ニ滿是其教相、因_レ此便明、五味教相雖_レ非_ニ部本意、傍知_ニ仏出世施開大綱_ニ五味調_レ機用_レ教、增減隨_レ根証入冷然自分_ニ云云故大經云、譬_レ如_ニ下從_レ牛出_レ乳、從_レ乳出_レ酪、從_レ酪出_ニ生蘇、從_ニ生蘇_ニ出_ニ熟蘇、從_ニ熟蘇_ニ生_ニ醍醐_ニ五味喻也、初云如_レ從_レ仏出_ニ十二部經、從_ニ十二部經_ニ出_ニ修多羅、從_ニ修多羅_ニ出_ニ方等典_ニ從_ニ方等典_ニ出_ニ摩訶般若_ニ、從_ニ摩訶般若_ニ出_ニ大涅槃_ニ五時法合_ニ、初譬_ニ從_レ牛出_レ乳、即乳味對_ニ華嚴頓教_ニ、八教有_レ五、化儀有_レ三、謂頓祕密不定、化法唯二、謂別円、酪對_ニ修多羅_ニ第二味、謂_ニ四阿含經_ニ漸初化儀有_レ三、謂_ニ小乘祕密不定、化法唯一、三藏教也、生蘇對_ニ方等發_ニ第三味、漸部中有_ニ七教_ニ化儀有_レ三、例_レ藏可_レ知、化法有_レ四、謂藏等四教也、熟蘇對_ニ般若_ニ當_ニ第四味、漸部後有_ニ六教_ニ化儀有_レ三即漸等、化法亦三、謂通別円、醍醐對_ニ法華涅槃_ニ第五味也、妙經唯有_ニ開權圓教獨顯_ニ一乘_ニ何者為實施權遍_ニ於四味、開權顯實收_ニ攝四味、五時八教、總入_ニ醍醐_ニ涅槃扶律明常、具有_ニ四教_ニ總知_ニ常住_ニ一期化儀出世大事其功畢矣（三八五a）

因みに、法聰は行滿と毘陵時代の同學で、元和一二年（八一七）、行滿は本書をみていることを、後記は記す。

11 明空（？）

『勝鬘經疏義私鈔』六卷（続藏一輯三〇套四冊）には、わざかに、法華勝鬘_ニ一乘の同異について、次のような教判説がみえるだけである。

五乘之別同是方便等者、此章明_ニ八地菩薩収_ニ前出生五乘_ニ以帰_ニ一乘_ニ出生是施權、收入是入実、即_ニ釈迦_ニ一化先三後二不_レ殊、故釈_ニ此章文_ニ全用_ニ一代化儀_ニ以_ニ釈迦_ニ於中_ニ即有_ニ褒貶抑揚_ニ大意不_レ殊_ニ淨名大集_ニ若爾_ニ法華_ニ何異、答、此今会者、言_ニ當得_ニ當學_ニ也、法華言_ニ現覺現得_ニ此經談_ニ其始終_ニ而現會也（三四二b）。

中里論文は、この文について、知礼が源信の間に答えた、一代三乘五味堅入説（教行録卷四、大正四六・八九〇c）と同意の説であり、『文句記』卷九中（大正三四・三二八c）において、「勝鬘_ニ一乘を一化五味堅入の機に対する会三の一乗とせず、飽く迄五味堅入以外一類の機に対する特殊の一乗なりと主張する釈意に反するものと思ふ」と評している。

12 『止觀科節』一卷（続藏一輯二編四套二冊）

本書は、円珍が、大中九年（八五五）に越州開元寺で鈔写したものである、と奥書に伝える。撰者は法藏撰とされるがこれは誤りで、輔行や道邃の説を引くから、道邃以後の天台学者の手になつたものである。

ここには、「八教五味」、「五時八教」と名指され、独特の教判説がみえる。本書の教判に関する説を抜き出してみると

次の如きである。

五教相者、一多互陳教相也、五略中裂大網、十廣中攝法偏円方便四門、並教相也、故一微塵中出三大千經卷、八教五味並自一心教相明矣、且分文屬當即爾、拠円旨一一文一一義皆具五也、此乃分而不分、不分而分固在意得耳、摩訶褒美之詞、止觀尅明心性、章安初題円頓、後改三摩訶、改者意何、円頓尊極之称、摩訶包攝周悉、約理宣尊極、約教宣周悉、周悉具三、即攝漸次不定五時八教一尽矣（一〇五b）。

故有中此三種止觀也、汎論漸次不定円頓有四不同、一約教論、八教中頓漸不定、此指華嚴唯頓、五時漸次而生漸也、一部中或具不具不定也、二約部論、華嚴唯頓、四舍唯漸、方等不定、法華唯圓、三約法論、下引淨名大品法華涅槃無量義等、各有此三是也、四約義、三種止觀皆是大乘、俱緣三実相、借漸不定以助円修是也、此四義意各異、可深思之、勿使濫也、此四漸中法華具三漸、大師自云從牛出乳乃至翻醍、此証漸也、此約五時相次生、名漸非法漸也、如是之人、應下以此法漸入佛慧、此叙昔有此漸法也、乃至舉一手、或復小低頭、此是円人用漸義助修也、約部法華唯圓、無復兼但對帶、會諸權小歸一乘故、約時法義何妨三漸、何累於円（一〇六a）。

略指三門大意在一頓者、三門謂序中三種止觀、漸次不定円頓一也、大意在一頓者、唯圓也（一〇六b）。

止觀第三第九並明八教、大師意頓等四、為化儀為綱、攝一代時

教盡、藏等四為法為網、亦攝一代教盡、若約法、法華唯圓唯頓、諸教諸理悉無比並、獨一無偶、故文云、即中捨三方便也、若約化儀、當第五時漸說也、大師言、唯華嚴頓、余悉屬漸、輔行云、

法華涅槃非漸非頓（一〇六d）。

知られるように、本書では、三種止觀は化儀四教の観念と同一のものとして読まれており、それをさらに、約教、約部、約法、約義の四義に開いて説明されている。又、約法には、法華は唯圓唯頓であるとし、約化儀には、第五時漸説であると規定しているが、これらの所説は、明らかに湛然の教判説とはかなりに相違するものであるといえよう。

13 広修（七七一～八四三）

14 維鑪（？）

次に、『唐決』（続藏一輯二編五套五冊）のなかで、天台教判がどのように論じられているかみてみよう。

最澄と道邃の間ににおける問答が最初であるが、道邃の答釈には注目すべき程のものはみられない。しかるに、道邃門下の広修の決答のなかには、極めて明快な形で教判論が掲げられている。全部で三〇箇條あるうち、教判関係は、第一～第四、第一一條で説かれる。「五時八教」の成句もみえる。又、広修門下の維鑪の釈疑についてみても、広修における場合と、ほぼ同傾向の同内容の説が存するので、ここでは便宜上、第一條と第十一條のみに限つて対照して読んでみよう。

広修決答円澄疑問

維鑪決答円澄疑問

第一疑引籤云、今法華是顯露等 問釈籤云、今法華是顯露等者對者、對非祕密故、云顯露於非祕密故、云顯露於顯露七

七中雖レ有三円教二、以ニ兼帶二故、是故不レ同、此約レ部說也、彼七中円与ニ法華円一其体不レ別、故但簡レ六此約レ教說也已上文也、今尋三文意、若齊ニ與義ニ則法華經同三八中円一、若爾此經亦為三頓漸化儀撰ニ之、為レ不レ、撰耶又約三奪義ニ則非三八攝一、若爾者此法華經為三何化儀ニ、為三化法ニ此義如何已上本疑謹案法華是顯露ニ、非前七之中有三華嚴一頓與三法華ニ同、下文云其體不レ別、約レ部說如三文示ニ、知故但簡レ六、此約レ教、說今謂與義約レ部、奪義約レ宗、所疑則法華同三八中円一者非也、只合レ云三七中円一以三藏教中無レ円故、如三文云ニ、七中雖レ有三円以三兼帶ニ故、言ニ此經亦為三頓漸化儀所ニ撰奪非ニ八者亦應レ言ニ七、問意為三何化儀ニ、為三何化法ニ、則撰ニ此法華部、此円與三法華ニ同、何以知、同一円故圓門內無三別法、施ニ於兼但對帶之事、故得三円名、今法華

与而言レ之但非三前六、何者七中
雖レ有三円教、以三兼帶二故、是故不
同、此約レ部説也、彼七中円与三法
華円^ニ其体不レ別、故但簡レ六、此
約レ教説也已上文也、今尋ニ文意、若約ニ
与義^ニ則法華經同ニ八中円^ニ、若爾
此經亦為ニ頓漸化儀^ニ攝^ニ之、為レ
不レ攝耶、又約ニ奪義^ニ則非ニ八攝^ニ
若爾者此法華經為ニ何化儀^ニ、為ニ
化法^ニ此義如何

円與前七中圓、無二無別、但當體自圓非三相待、故猶得稱妙之意如レ此、若問下為何化儀、為何化法者、且云五時八教之法、如來應レ病設レ藥、化儀即有三漸頓祕密不定、化法即有三藏通別圓、今若約レ部不レ論三漸頓、教中化各有レ儀、一一教中化各有レ法隨レ部對レ事一一具レ八、藏故亦具三儀法、何者且如三鹿園、是漸教化儀本為漸人、八萬諸天便發三大道、此是密得、不定之得、此教用三漸法、故無三頓機、謂也、密不定儀、此非三教本意、所レ得者機也、單用三藏教三宗、但是漸一教、余七宗皆不レ用、通別圓中用不用、類例比知亦如レ是、具如三四教圖中可レ解レ名、言三法華何化儀何化法者、此是圓教宗、化儀唯圓、化法唯頓、故称三圓頓、在三法華中獨得レ称レ妙、如前說、余華嚴方等般若、若拋三所化、各有レ儀、亦各有三法教、教之中皆具三八教、但有用不用殊此義、心レ知(四〇五b)

但對帶之齋、法華唯圓故獨稱妙、八不レ撰也、實相為レ體、体亦無レ二、將レ部往望諸經實者自實、權者自權、隔歷不レ融、未レ同ニ一乘因果為レ宗、散心小善三乘偏行悉是円因、寿量塵点本地三身方是妙果、八教之所レ未レ開也、斷疑生信為レ用、燋種根敗能生三華菓、如聲如癌咸得ニ聰明、必死之人更賜ニ寿名、如レ斯之用八教所レ無也、名体宗用既別、教相固合レ不レ同、故法華經非ニ八教撰ニ也、然離ニ八教ニ外無ニ別一教、復対ニ化儀化法弁也、儀者威儀布致次第也、頓漸不定祕密、頓漸對ニ五時、不定祕密約ニ頓漸中ニ義立耳、化法有レ四、藏通別円、楷定軌範不ニ移易ニ也、儀中用レ法、法須レ約レ儀、參而不レ雜也、若單約ニ化儀、華嚴唯頓、余經唯漸、文云鹿苑至涅槃ニ漸也、又云從レ牛出レ乳、五味皆漸也、諸如レ此文、且約ニ化儀、法華漸也、玄文第一卷判ニ教相ニ云、今經若法被レ緣名ニ漸円

教者、漸即約儀、円即約法、文句云華嚴頓鹿苑至般若漸、法華是會漸歸頓、諸如此文、頓是約法、此儀法合弁也、曰今當說法華第一、一乘円妙迥異余妙、牛食肥膩即出醍醐、圓頓機擊出無作法輪、復有二行是如來行、今當為汝說實最事、諸如上文、此唯約法明也、學人細尋方免雜亂（四一五c）

第六問判教相為六、文云一拳大綱、乃至六增數明教、大綱三種、一頓二漸三不定、此三名同舊、義異也、疑云一家文中、多用四教、判一代教、今至此文更立三教、何為正義者

答此問失前大綱意、所言大綱三種、謂仏一化之中、大途綱要之法、不出頓漸不定之三也、今有祕密、只可屬仏道、祕密不傳故無也、此大綱三法、四教之中一一教中各有此三、具且如華可云、存義而已、今論文部故嚴頓部、兼其一別即是漸、亦此略也（四一七d）。

第七問判教相文云、判教相者即為六、一拳大綱、乃至六增數明教、一大綱三種、一頓二漸三不定、此三名同舊、義異也、疑云一家文中、多用四教、判一代教、今至此文更立三教、何為正義

知られるように、広修及び維鑑の釈疑の立場は、湛然教学を繼承する正統の立場をもつて自らに任じてゐる。第一條についていえば、約教、約部の二釈にそつて、湛然に成立する法華超八の宗義をきわだたせているし、第一一條には、十卷教相の問題が論じられ、三種教相は化儀に外ならぬと決している。いずれも湛然に承ける釈義であり、このような唐決という日中天台学の交流を通じて、しだいに定着していく湛然教学の教權の所在が明確にされようと思う。

15宗頴（？）

その後の、義真、光定などの疑問では、教判に関するそれほど明瞭な説はみられぬが、徳円疑問、宗頴決答の『釈疑』のなかには、第五、建立四教与開漸四教同異、及び第六、本地釈迦与毗盧遮那同異の問答で、教判論が別の視点で論じられている。ここには第五條のみを挙げておこう。

第五建立四教与開漸四教同異

八教大意云、漸頓祕密不定、能化之儀式、譬如藥方、藏通別円、所化之法譬如藥味也、止觀義例云、今文隨教雖說若八若四、本意唯為成仏乘、法華文句云、仏在法身之地寂而常照、恒以仏眼洞

有不定機、如經可尋、鹿苑但漸部亦有頓、八方諸天是也、亦有不定機、般若亦如是、此三是佛法之大綱、四教各各具有知之耶（四〇八a b）。

覽無レ遺豈始至三道場、淹留三七方思ニ此事、言ニ三七日一者、明ニ有ニ所表ニ也、表ニ仏初欲ニ三周説ニ法故、仮言ニ三七ニ耳、初七思ニ法説、次七

思ニ譬説、後七思ニ因縁説、皆無ニ機不レ得、是故息ニ大施ニ小也、此偏就ニ内教大乗ニ為ニ釈耳、若通途約ニ大乗ニ釈者、初七思惟欲ニ説ニ通教大乗、皆無ニ機不レ得、是故息ニ大説ニ三藏ニ云、云今自宗中有人依ニ此等文ニ乃ニ云、開漸四教外、更無ニ建立四教、唯有ニ八教ニ至ニ無ニ建立四教、又有人云、開四教有ニ兩種、謂建立四教及開漸四教、言ニ建立四教ニ者、法身地中所ニ思惟ニ四教、名ニ建立ニ也、言ニ開漸四教ニ者、阿含方等般若之中所レ説四教也、今疑此ニ二師義、取ニ何ニ為ニ正、又有人云、法華之円、建立四中所レ撰、不レ閑ニ開漸四ニ也、華嚴別円、亦建立中所レ撰、不ニ是開漸所撰、此人所立得否如何、又疑法身地所ニ思惟ニ四教、即是前四味中所レ説四教、為ニ復法身地相思惟四教外、別説ニ開漸四教、此義如何

通曰所ニ言建立四教者、雖ニ未ニ有ニ文、而有ニ義可ニ通、所ニ以然ニ者、仏於ニ法身之地ニ心中所ニ建立ニ者、出ニ世方説ニ之、所ニ以名ニ建立四教、非ニ無ニ所以ニ矣、建立亦無ニ妨、但准ニ義推ニ之、法身地之所ニ思惟ニ者、宜ニ名ニ心地四教ニ也、將ニ意地所ニ思、望ニ赴機之説、但冥顯時異、拠ニ此理ニ則相撰無ニ妨、若約ニ時論、未開之時不ニ同ニ已開之日、況乃漸中之円、猶有ニ對帶之異ニ乎、華嚴別円与ニ漸中別円、亦拠ニ時則異、以有云下華嚴別円及法華之円、並於ニ開漸四教ニ所ニ不ニ撰者、得ニ其一理ニ法身地所ニ思惟ニ四教、開漸四教、如ニ上所ニ説、拠ニ時則有ニ前後之異、若論ニ其法ニ兩時四法体皆同也（四二七c～四二八a）。

最後に

湛然以後の、天台教判に関する研究は、総じて湛然教学の祖述ないしは継承であつて、湛然によつて「五時八教」という新造語によつて一旦指示されてみると、その方向はいかにも相応しいものとして、多くの学人によつて再確認され、教権を堅持していつたようである。そして、このような動向は、宋代になつて諦観が『四教儀』を著わす（九七一）頃まで連綿と地底に流れつづけたと考えられる。そのことは、少異はあつても、概ね同型の教判論が、多数の人々によつて理解されていたことを証明する、前掲の諸事例が自ら語るであろう。諦観錄が現われて、そこに今までなかつたような突然変異の教理的現象が起り、にわかに「五時八教」と名指される天台教判が出現したといふような意見には、私はいかにしても同調することはできない。孜孜として努めた長い天台学の研究史がゆきつく果てで、一面の成果として諦観錄が生れるべくして生れたと、そう私は考えたい。不充分ながらも、本稿はそのような教学研究のあとかたを彷彿とさせることはできたと思う。前述の諸資料に基づいて、諦観錄成立の多くの契機を指摘することができると思うが、今は紙数に限りがあるので、それらの点については後日の機会に、論じたい。

（昭和五〇年七月）